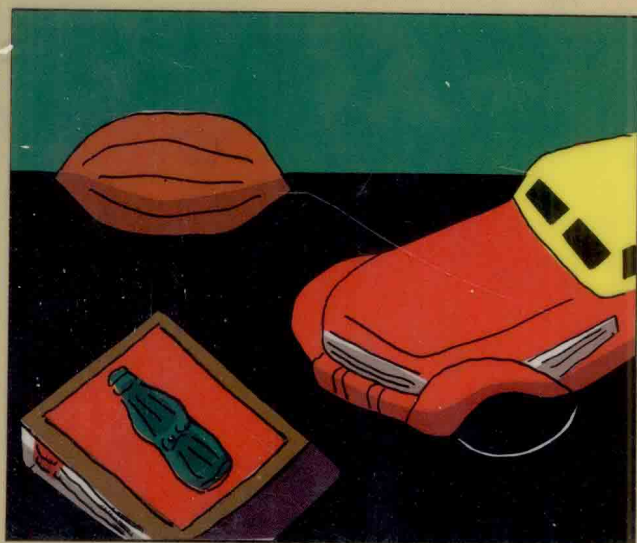


雨の日には車をみかいて

五木寛之



雨の日には車をみがいて
五木寛之

角川書店

雨の日には車をみがいて

発行日——昭和63年6月25日 初版発行
平成元年2月20日 11版発行

著 者——五木寛之

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3

電 話——営業 03-817-8521
編集 03-817-8451

振 替——東京3-195208 ㊦102

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——株式会社鈴木製本所

ISBN4-04-872500-9 C0093

© Hiroyuki Itsuki 1988 Printed in Japan

雨の日には車をみがいて

ブック・デザイン／イラスト
安西水丸

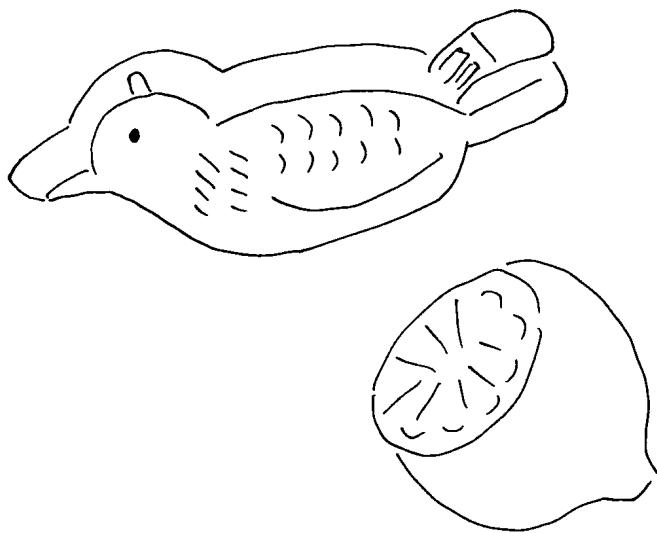
目 次

第1話	たそがれ色のシムカ	5
第2話	アルファ・ロメオの月	41
第3話	アマゾンにもう一度	73
第4話	バイエルンからきた貴婦人	103
第5話	翼よ! あれがシリィの灯だ	133
第6話	ビッグ・キャットはしなやかに	165
第7話	怪物グロッサーの孫娘	193
第8話	時をパスするもの	227
第9話	白樺のエンブレム	261
	エピローグ風のあとがき	289

第1話

たそがれ色のシムカ

—シムカ1000—



その年の夏のはじめ、ぼくは思いがけない車を手にいれた。そしてその代償だいしょうのように、ひとりの女ともだちを失うことになった。

車はフランスの大衆車たいしゆ、シムカ1000。そして女ともだちの名前は、揺子ようこ。

ぼくが彼女を本当に愛していたのかどうかは、わからない。だが、ぼくがそのシムカを愛していたことだけは断言できる。

昔はやった文句に、〈ジャズと自由は手をつないでやってくる〉というのがあった。しかし、素敵な車と素敵な女が手をつないで一緒にやってくることなんか絶対にありっこない。そうなのだ。いまにして思えば、ぼくは無意識のうちにあの車を、彼女とくらべていたのではあるまいか。そしてたぶん、ぼくは車のほうを選んだのだろう。

彼女がいなくなつてからも、ぼくはずっと揺子のことを忘れなかった。彼女に言われた言葉のひとつひとつを、ぼくはいつまでも鮮明におぼえていた。あの愛すべき、そして危険なトゲを隠した数々の名フレーズを。

要するに搖子は、なにごとにつけ、ひとこと多いタイプの女だったのだ。しかし、世の中はわからない。そのひとことが意外にも彼女に成功^{シユクセ}への片道切符を手渡してくれたのだから。

だが、その切符を搖子の手から残酷に取りあげたのも、また彼女の不用意なひとことだった。

ぼくがうまれてはじめて所有した車。それがおんぼろのシムカ1000だったというのは、今から考えるとなんとなく滑稽^{らうげい}な気がしないでもない。だがそれは年式不明の中古車とはいえ、一応れっきとした欧州車である。ぼくは有頂天^{うちようてん}だった。それも当然だろう。やっとひと月前に運転免許証をとったばかりの身で、いきなり外車のオーナーになったのだから。

今なら、地方からきた女子大生が自分のメルツエデスをもっている、だれもそれほど驚いたりはいしないだろう。だが、一九六六年のあの頃はちがう。ブルジョアの息子でもない二十代の青年が自分の外車をもつなんて、まるで現実味のない話だった。なにしろ日本円の為替レートが一ドル三六〇円、ちようどスバル軽の空冷2気筒エンジンの排気量とびつたりおなじ数字だった時代だ。

ビートルズが東京へやってきた年。常磐ハワイアン・センターがオープンした年。そして中国に文化大革命の嵐がまきおこった年。

その春、ぼくは放送作家の卵として、はじめてブラウン管に自分の名前がうつるのを見た。作家とはいっても、ドラマではない。音楽バラエティ番組の構成グループの一人としてである。

それだけでは食えないので、なんでもやった。CMソングの作詞から、PR誌の編集、歌謡ショウの構成、手がけた仕事はほかにもいろいろある。二十代のなかばにさしかかってはいたが、まだ独身だった。だからあの程度の収入でも、なんとか生活がなりたつていたのだろうと思う。

そんなぼくが外車を買ったといったとき、搖子はひどく輕蔑した目つきをした。

「外車？　どこの？」

と、彼女はそれがくせの小鼻の両脇にしわをよせるような微笑をつくって言った。

「北京の人民公社製の自転車でも手にいれたんでしょ」

ぼくたちはお茶ノ水駅の近くの〈檸檬^{れもん}様で、窓際の席に向きあって坐っていた。彼女は週に二回、アテネ・フランセでフランス語の初級のクラスにかよう。週に一回、パントマイムの教室に顔をだし、ときどき発声のトレーニングを受ける。そして、それらの授業料

と生活費をかせぐために、毎晩、この近くの酒場で働いている。

彼女は初対面の相手に職業をきかれると、小さなクラブで歌っています、と答えた。それは嘘ではない。彼女が働いているのは、シャンソンを聴かせる「グランド金曜日」という店だった。それは品のいい音楽サロンといった感じの酒場で、マダムは宝塚の往年のスターである。搖子はそこでウェイトレスをやり、客のすくない晩にだけ、ときどきバンドの前で歌わせてもらうのだ。

彼女は石井音楽事務所が毎年やっているシャンソンのコンクールに、二年つづけて落ちていた。それでも東大生歌手として話題になった加藤登紀子が優勝した年には、かなりいい線までいったという話だった。

「ZTVの錦原きんげんさんに車の話をしたら、中古のヴェスパでも手に入れたのかい、って笑われたよ」

と、ぼくは言った。搖子の毒舌に正面から逆らう愚をさけて、半歩しりぞきながら軽いジャブを出したのだ。錦原をニシキハラと読むのは外部の連中で、業界人ならみなキンバラさんと呼ぶのが常識なのである。

「あの人、きらいよ」

と、搖子は腰までとききそうな長い髪をかきあげて言った。

「局長待遇のプロデューサーだったら、ちゃんとしたスーツでも着てればいいのにね。いつかパーティーで見かけたときなんか、マリメッコの縞シャツに、VANのパンツなんだから。セリーヌの大きなバックルつきのベルトをおなかに巻いて、腕にはロレックスの時計でしょ。おまけにスコッチ・グレインのブーツを顔がうつるほどぴっぴかぴかに磨いてるんだもん。もう、歩く万国旗って感じ。見てたら熱だして寝こみそうになっちゃった」

ぼくはあわてて話題をもとへもどした。揺子という娘は、ちよつと類をみないうるさがるたなのだ。なにしろ揺子の雑学には年季がはいっていた。つい先ごろまでスコッチ・グレインの靴を丹念に光らせてはいていたぼくとしては、もう外車のシムカで押すしかない。

「自転車じゃなくて、リア・エンジンの欧州車を買ったんだがね」
と、ぼくは軽くおさえた口調で言った。

「ビートル？」

揺子ははじめて意外そうな顔をした。

「いや」

ぼくは首をふった。

「フランスの車さ。シムカ、っていうんだ」

へえ、と、揺子は一瞬、げげんそうな表情をみせたが、すぐいつもの顔にもどった。

「シムカねえ。このところばかにルノーが人気があるみたいだけど」

「ルノー？ あのルノー・8・^{エイト}ゴルディーニのことかい」

搖子は肩をすくめた。

「それを言うなら、エイトじゃなくてユイットと発音してほしいわね」

「あれは形が好きじゃないんだ」

「それにお値段が高いし」

ぼくが黙りこむと、彼女は微笑して立ちあがった。長い髪が逆光の中で揺れて、かすかな植物性の香水の匂いがした。

「わたしに見せるために、もってきてるんでしょ。その車、どこにとめてあるの？」

ぼくは待つてましたとばかりに勘定をすませて店を出た。そして思い切り短いスカートから形のいい脚を見せてはむように歩いてゆく搖子のあとを、あわてて追いかけた。

その夏、ミニスカートという新語はまだ一般に定着してはいなかった。プラタナスの街路樹ごしに午後の陽ざしが斜めにさす中を、彼女は白いフォーミュラーのようにきれいに滑ってゆく。ぼくは一瞬、たちどまってそのシルエットに見とれた。

ぼくがわずかな貯金のすべてをはたいてシムカ1000を買ったのは、もちろんそんな彼女に夢中だったからだ。彼女のうれしそうな顔を見ることができのなら、ぼくは百万

フランのイスパノ・スイザだって手に入れただろう。もつとも、このあいだ作詞した番組主題歌がミリオン・セラーにでもなればの話だが。

国電の駅からすこし離れたニコライ堂の脇の道路に、赤いシムカはおとなしくぼくらを待っていた。あれこれ背景をロケハンした上で、とりあえずその場所を選んだのである。だがそのギリシャ教会建築の曲線的なたたずまいと、弁当箱のようなボクシーなシムカ1000とは、いまいちしくりこなかった。それでも周囲の風景を切りとって見れば、その辺はかなりエキゾチックな雰囲気を感じさせる舞台というべきだろう。

「あれだよ」

と、ぼくはわが愛しのシムカに顎をしゃくって言った。

「あれが、ぼくのシムカ1000だ」

その瞬間のうつとりするような恍惚感をなんといえがいいだろう。うまれてはじめての自分の車。それもフランスからやってきた可愛いやつ。こちらの意のままに、どこへでもぼくを運んでいてくれる自由のメッセンジャー。

「これ、なんなの？」

揺子の冷笑的な声がぼくを現実にはきもどした。彼女はうんざりした顔でシムカを横目

で見ていた。まるで正面から見るのが目のけがれとでもいったような、意地の悪い眺めかただった。

「シムカ。フランスの」

ぼくはおずおずと答えた。はやまりすぎたか、と内心でやや後悔する気分があった。はじめて手に入れた車に有頂天になったあげく、自分だけ舞いあがってしまつて他人の思わくなど計算する余裕がなかったのだ。すこし使いこんでから偶然のように彼女に直面させるべきだった、と、ぼくは反省した。

「へえ。シムカねえ」

揺子は腕組みしてうなずいた。ぼくは覚悟をきめて、つぎに降り注いでくるだろう彼女の辛辣な批評を、マゾヒスティックな期待感さえおぼえながら待った。それならそれで、できる限りの反論をするまでだ。こつちにもそのための材料がないわけじゃない。

しかし揺子はずっと残酷な態度に出たのだった。彼女はため息をつく、両肩をすくめてぼくを見た。彼女はなにも言わなかった。むしろ優しささえ感じられる目つきで、ぼくを抬げますように微笑した。

「まあ、いいんじゃない」

ぼくのシムカは彼女から完全に黙殺されたのだった。悪口をいう気さえおこらないとい